情報ボックス

シルバー人材センター,地域包括支援センターの連携で就労や社会参加につなげるコーディネート事業などを提言

厚生労働省「生涯現役社会の実現に向けた就労のあり方に関する検討会」が報告書を公表

厚生労働省職業安定局高齢・障害者雇用対策部高齢者雇用対策課は6月24日，「生涯現役社会の実現に向けた就労のあり方に関する検討会」（座長：大橋勇夫・中央大学大学院戦略経営研究科教授）が取りまとめた報告書を公表した。

報告書ではまず，基本的な考え方として，人生100年時代を見据え，働く意欲のある高齢者が培った能力や経験を活かし，生涯現役で活躍し続けられる社会環境を整えることが必要と指摘。とくに65歳を迎えた団塊世代が労働市場からの引退過程に入り，サラリーマン層の多くが地域に活動の場を移しつつある中，これらの人が活躍できる環境を整備することが喫緊の課題とした。

また，生きがいある社会参加は，健康維持や介護予防はもちろん，社会保障の負担軽減にもつながると指摘するとともに，家族が担ってきた子育てや高齢者への生活支援，介護などの分野で経験豊富な高齢者に現役世代の補助的な役割を担ってもらい，社会の支え手として活躍してもらうことが望まれるとも強調した。

その上で，生涯現役社会の実現に向けた就労・社会のあり方として，次のような提言をした。

①高齢期の就労・社会参加に向けた意識改革…企業で働いていた頃の仕事に対する考え方や職業能力に関する自己評価を，地域の支え手となるという尺度で見直すことが必要。そのため，企業が行うキャリア構築を促す取り組み，定年退職予定者などに対する意識の見直しやキャリア再構築を後押しする取り組み，現役中における地域の他企業におけるインターンシップ実施などが有用である。

②プラットフォーム・コーディネーター設置の推進モデル事業…シルバー人材センター，社会福祉協議会，地域包括支援センター，NPO等の各機関の連携強化を行うため，情報を共有するプラットフォームをつくるとともに，地域のニーズを発掘，創造し，意欲ある高齢者を見出し，マッチングさせていくコーディネーターを活用することが重要。こうした取り組みの普及のため，モデル的な事業が必要である。

平成24年度の児童虐待件数6万6,807件 虐待死事例では「妊婦健診未受診」「望まない妊娠」が課題

子ども虐待による死亡事例等の検証結果（第9次報告の概要）などを公表

厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課は7月25日，児童相談所での児童虐待相談対応件数および社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会が児童虐待防止法にもとづいて行った虐待による死亡事例等の検証の結果（第9次報告）を公表した。対象は，平成23年4月1日から翌年3月31日までの子どもの虐待死事例。

児童相談所での児童虐待相談対応件数は，平成24年度速報値で6万6,807件。平成23年度の5万9,919件を上回り，10年前の15年度の2万6,569件の約2.5倍にも達した。

一方，虐待による死亡事例等の検証の結果（第9次報告）によると，対象期間に発生または表面化した虐待死は，心中以外の虐待死事例56例58人（平成22年度：45例51人），心中による虐待死事例 29例41人（22年度：37例47人）だった。心中以外の虐待死事例で死亡した子どもの年齢は，0歳が25人（43.1%）と最も多く，3歳未満が39人と約7割を占めた。虐待の種類は，身体的虐待38人（65.5%），ネグレクト16人（27.6%）。直接死因は，頭部外傷15人（25.9%），頚部絞厄以外による窒息8人（13.8%），頚部絞厄による窒息6人（10.3%）であった。主たる加害者は，実母が33人（56.9%）と最も多く，次いで実父が11人（19.0%），実母と実父が5人（8.6%）。実母の抱える問題（複数回答）としては，「妊婦健康診査未受診」「望まない妊娠」「若年（10歳代）妊娠」が多かった。また加害の動機としては，3歳未満の事例では「保護を怠ったことによる死亡」と「泣きやまないことにいらだったため」が多かった。このうち，0歳児の心中以外の虐待死についてみると，日齢0日の死亡が7人，月齢0か月の死亡が4人，月齢1～11か月の死亡が14人であった。0日・0か月児の事例では，実母の抱える問題（複数回答）として，「妊婦健康診査未受診」が9例，「母子健康手帳の未発行」が8例であった。月齢1～11か月児事例では，14例のうち13例が関係機関で何らかの関与があった。

児童相談所の関与は，心中以外の虐待死事例が17例（30.4%），心中による虐待死事例が5例（17.2%）であり，市町村（児童福祉担当部署）の関与は，心中以外の虐待死事例が16例（28.6%），心中による虐待死事例が4例（13.8%）であった。要保護児童対策地域協議会で取り扱われていた事例は，心中以外の虐待死事例で14例（25.0%），心中による虐待死事例で1例（3.4%）であった。

地方公共団体と国に対しては，養育支援を必要とする家庭の妊娠期・出産後早期からの把握および支援のための保健機関（母子保健担当部署）の質の向上と体制整備，児童相談所と市町村における専門性の確保と体制整備，要保護児童対策地域協議会の活用促進と調整機関の機能強化などを提言している。

使用者による障害者虐待が認められた事業所は133件

厚生労働省が使用者等による障害者への虐待の状況や講じた措置などを公表

厚生労働省大臣官房地方課は6月28日，障害者を雇用する事業主など「使用者」による障害者への虐待の状況や，虐待を行った使用者に対して講じた措置などについて取りまとめ，公表した。障害者虐待の防止，障害者の養護者に対する支援等に関する法律第28条にもとづき毎年度，公表するもので，今回は平成24年10月１日の法律施行日から平成25年3月31日までを取りまとめたもの。

それによると，使用者による障害者虐待が認められた事業所は133事業所，虐待を行った使用者は136名だった。直接の虐待者と被虐待者との関係をみると，事業主113名，所属の上司19名，その他4名だった。使用者による障害者虐待が認められた事業所の規模は，労働者数5人未満が21事業所（15.8％），5～29人が73事業所（54.9％），30～99人が26事業所（19.5％），100～499人が7事業所（5.3％），500～999人が１事業所（0.8％），1,000人以上が1事業所（0.8％），規模不明が4事業所（3.0％）となっていた。被虐待者は194名で，障害種別にみると，身体障害25名，知的障害149名，精神障害23名，発達障害4名だった。虐待の種類別では，身体的虐待を受けた者 16名，性的虐待を受けた者1名，心理的虐待を受けた者20名，放置等による虐待を受けた者15名，経済的虐待を受けた者164名だった。

使用者による障害者虐待が認められた場合に採った措置は，全体で183件。内訳は，労働基準法等労働基準関係法令にもとづく指導等159件（86.9％），障害者雇用促進法にもとづく助言・指導20件（10.9％），男女雇用機会均等法にもとづく助言・指導１件（0.5％），個別労働紛争解決促進法にもとづく助言・指導3件（1.6％）となっている。

東京オリンピックを知る世代が「語り部」となって感動を伝えるウォークイベントでゆかりの地めぐる

2020東京オリンピック・パラリンピック招致祈念ウオークを開催

1964年に開催された東京オリンピックの当時の競技会場などを歩いて，あの感動と感激を若い世代に伝えようという「2020東京オリンピック・パラリンピック招致祈念ウオーク」が8月31日，9月1日の2日間，開催された。2020年のオリンピック・パラリンピック開催地が9月8日のIOC（国際オリンピック委員会）総会で決定（8日未明に東京開催が決定）する直前に，日本招致の実現を祈念しようと開かれたもの。

東京オリンピック開会式入場行進の実況放送の再現に続いて行われた出発式では，文部大臣等を務めた元衆議院議員で現在，日本プロスポーツ協会会長の島村宜伸氏が「私は東京オリンピックの感激を忘れることができない。今の子どもたちにも，同じ感動を届けたい。そして、植え付けてあげたい」と挨拶。また，衆議院議員で日本ワールドゲームズ協会会長の小野清子氏も，東京オリンピックの体操で団体銅メダルの経験から，「あの感動をもう一度，日本で」と檄を飛ばした。

東京オリンピックの開会式の会場だった国立競技場には，小学生から80歳代までの参加者およそ300人が集まり，午前9時過ぎにスタート。行程は，選手村だった代々木公園，水泳などが行われた国立代々木競技場，重量挙げの会場だった渋谷公会堂などをめぐり，レスリングやバレーボールの会場であった駒沢オリンピック公園に至る13km。「来たれ！東京へ」「日本でオリンピックが見たい」などとメッセージが書かれたゼッケンをつけた参加者は，強烈な日差しが照りつけ，気温も35度に達する中，休憩ポイントで配られた飲料水で喉を潤しながら，それぞれの思いを胸に歩いた。参加者にはゴール後，記念完歩証が手渡された。

このイベントは，東京オリンピック・パラリンピック招致祈念ウオーク実行委員会が主催し，東京オリンピック・パラリンピック招致委員会や日本プロスポーツ協会，日本健康スポーツ連盟，日本ウオーキング協会，木谷ウオーキング研究所などの共催により行われた。主催側の関係者は，「当時の東京オリンピックを知っているのは，もう団塊世代以上の高齢者。知っている世代が語り部となって，子どもたちと一緒に歩き，その素晴らしさを伝えてくれたのではないか」と話していた。

出発式の模様。参加者のゼッケンには各人の思いが書き込まれていた。

（記事提供＝株式会社ライフ出版社）